獨寐

渋園著

謄写未完

イ 5
408

増 408 門 類 巻

帝國圖書館藏

自序

獨寐のさひしきにつれ〳〵て硯にむかひいたつらふき
ことをかき出しぬれハある ハ青楼の秋のよの
りめくりや花手くれの姿をあらハし或ハ花のあ
した雪の夕暮眺に見耳になくて五落六路の
の世界に人を亡客實の入あるやけくつかゝる雲
のうへにまよひもあるを文ハいつはりなる戯作
もてはやされつたの草子きまゝのきぬまゝ大せい人
作客の心にとゝ侍るといふとあらハれ艶山叙か
さ学者の一生何ことの風といひ氣といひて法の
むしろえの道にこそまんさられハきのふのさゝかるとか

明治卅七年十二月五日購求

ゑ花ゑ月のあはしまさ捨られさへのゑ
のあら由きえもてもろき世としも頼ふるゝ秋
ゝはるさゝ荘周か夢をもゆるんとみさらんハ
空はくちおしからぬまゝに二十一の夏大
和の書すみ気をされめて九条とよふ家のかた
ころ行の網代のいとあはれてさまかきて
はいなくさみの種とのゝもしぬ郡山散人かつら
信之

比止里祢 上

目録

手水の粉　ひとしとあけ
葉洲の儒学　八疊獅子
はとめの床　女十一娘附 仙菜秘傳
学問の言ものの　未悟ハ三平一二満
情を焼あるまし　分別の庭速
傾城床の五字　うつをたる大事
爨とさしはのおもむ　謡うたの端本
耳うとき　くしの役ふ
人のすき　智作

生駒山の鳥餘糧　朋友の信
物に前兆ある　人を疑ふなり
尺八　つゝみの間
今昔の人情　哀楽のうら表
山の神　信を篤うすの基
草木の論　墨の秘事 附手習
花の香　画のまなび
ビイドロ　綺く絵

手水の粉

魚子が句に朴もし疑き句ゆるを　傳きれて笑たく
坊をあられるといふに　木綿するとて遊女道志
この句治湖ホとしく参て思しく若紫と賜はせ
し書をおゝへと云ふ上書うしてよこさせ
こゝろようて金ヶ前書あゆ見て若紫といふ太夫
しけるかくはるけるくて尼になり
し故かく詳　白雲の二階にさらしまいつ刻と
かゝ迄そいしそうす是の迄ふるは貞あらふなる
手水の粉と云ふもの一包に朱印をしてまいらすい

もしとのみなるも来ぬかと云下心れかし

　女ごころあけ

夕暮ちかしきまま蘭洲の居ねむりしと咄しかけるを

秋まつりまんぬ執行しぬ大かた女郎もここもそあ

けのよきに雷の太鼓のなるきまて同しと云ふ石のか

なるもまくてこし駿河東西へ分して諸方より北

里のけしきいとなつかしくおもふ古の都も

目まつるもみあけまつしといひて書くしけ

きハ近きまち北里のけしし たたも検校まさつくなし

といひしも惜むかめよしかし

蘭洲の儒学

角町吉原の蔦屋蘭洲かハ名をとるも儒者

なれあらしれしや北里のまれ出てよしなるも

世もてえやされぬいと口惜しけれ我夫子も

是をなるも寸出咄き丸もかし田原屋の先

生も胡弓をを能得かなの文字よみもならぬと云

ふ人のあれを繁みかし能くはいとど爾しかの

なおと云ふを聞ちなる趣して三味線琴子

能よく深ふるいやしき抄のよしあまりし

しまいなる大臣の云ひ来るも名る揚屋の亭主

あるは三浦いえしきの主の経史まで十二段を

よめるを儒者のさうぐくなるを同しまし上

あらんかし

八段獅子

三味線に七段の獅子あるは誰も知る事なるを之
八段獅子とて八段あるは佐山検校といひし人に傳へけり
ここの獅子を弾くもの七段をさへ思ふのみなれ
うし堺絲手也中島絲也といふ手ほとんど絶
て世にすくなし岩城に云ひしハ梅市といふ座
頭傳へて弾くもありし土九大きなる捨なるも
誠の堺中島を今ハまなびしと心得ぬもかく面
白き手の傳はらぬもいと口惜しされとても世にまゝなるき
あるは面白きこともあらんか或樂人の云しハ樂

の調子昔よりは甚多しとなるを吉原のさゝめにて聞き
雲を貫きて上る花の調子あまつ上方の三すしハ
元より上ても呂なるをとふして見ても恋路の深きハ
上方なるを拍ひ清きを姿をきかなるもけしき
ことしく女郎なるも江戸ハどふしても勝しき拍
云ひなれ恋路のさたるといふの真実の説なるを
太江戸生れの者を見つけて武江を贔屓しつゝ
と上方に續く事なるといふ手段立てもやる
為し余も江戸生れなれバ評するなれど
真なるも三味線も同し上方のうつくしき絶
静かなりてうるはし

法と父の床

松さまといふ女郎の云ひしを法と父の出世床

ろさへ入られハ廓ハ不断花盛こそめでたし云々

床狂つられをなしいやなる客も座せ抱き

立らして此ある借金をすふこその縁つきて一しよ

目出度と云ひしも惜しからぬ志かなや

女子十一の嫁　附　仙茶の政傳

むかし御代の頃さハ女房の目好みして楽

みなる政離お（の）三下りはもみなゝくてま

親仁お様なき家の娘の為えを床へ嫁

子の心親志いてまたとやかなえんつなぎ縁を結ひけ

ろまるて一不ハ妹のよろつおいてさいうろく

悶縁の孫ときるまとなけうれしけれ又人世る

ともる廷らまつるこふ母の寝も斗ち雑

く石の婦女の親なるもろきゝあそして朝夕んハ

私もしいやなる見ハなるをむつと目ふけ夕茶子

えをいうたてしくの口もとやと思ひなん何の楽み

のあらん一剋もはやく継生を乳の為きゝよあ

う金う始ひこそのをいらんなん

親の大きなる　なるみあけのなつき　大恩深の

忠き　父母の大きなる　くちひるの厚き

いろのくほき　鼻を上向る　せいのひくき

あまりひくきなる　おかめたらくこそあれ
手足のふとき
大かたの女のしきものをもとめぬるまし女をえん
とするは武家の吐逆せし事を昔は思し忘るる
顔の生するをも一生ひも枚数ちいさくして
今もま生れ白く拍子しやさしくめしあそは
なさかりるて氣轉しきらんやうなやさしき女に
替仙家の不老不死をもとめたらしきれ心には
てつかはしく三助すくなくて深めふそて青羽
なきまゝ顔あるてさ身震ひすることなく
八幡宮の御に乗し馬のふとく生くしさん人

なや地女のやさしくあらみるを女郎のあそびにて
しきもるをもいや郎となし比生駒山秋子
詩ふて恭のしのけ忘け母を末の茶ふきさらは
て谷ふかふ山みそかるはいと心すまさる折節一
人の志なるに道ひしが行歩とふかふさうく顔
色桃のえのやうにしもあやしくまるそ問てい
ふそなたをいかなる人ぞかやうの仙ぞ尋ぬれば
むし獄に年も餘旅をいへとまゝれ郎をも内搦
まつもなまて七十計りなる兄の客めて他人の花
そし子孫にあしなるも大かた孫從ひ花くもお
そしかるやいとめて不死の煉茶術子拾あらん

少しは書を讀んだと云しゆゑ此先人笑ひて無經濟
目利にて則ち私も地獄の仙人にして下りものの拔なる
氣味なる飛行はいふも一つの仙丹を持ちなさるにも金
淡雪の庭の上をあるき少々仙術でござるか出
くはお傳いたしませんと云ふ僕をて篤ぐ口堅めして
お傳を請けたる島原の女郎にて立奏五十目吉
原の旅にて芳かるを燒て用ゆるよし是斗りはむさ
き仙業をというなる仙術を得たるも出抽おもひ入し
女郎の病本復するなれど香んでやらんといふは情に
らぬことぞかし

学問の賣ゑの

地女のくせとして太夫と張合ても地女を好たんも同じ
ことの揶揄と笑ふものあらん井の内蛙大海を志らざる夜
の蛙の冬の氷を志らぬ心にては尤とはおもひつゝも
不備者とかいふ言語にまかせし学問文才も利
りしても又是は学者には手を能くする伽羅十
炷香に通じ詩も詠むとなる清村三先生の
いふごとく金ある者は二十両なくんば書をつゞるしとし
居しといくとも論語は友達方よりも萬年なる
ならこそ通じぬやとの在まひしに徒古の無友
遠きは各おと居宅のいひしも嫉し吉野太夫
俳諧の偶の湯衣をきせて又なると云しも尤のこと

なまじ抱て足の爪先よりてつむりの上までとらし抱とかく
抱との用もかわりて出来もし拙者なりその道よりえらぶ
ことなるべしめをば為さずる余十三の時より唐土の子を
まなびいま二十一のとしまで覚えし子の口惚
れし太夫の出世となりとこるまで仕たし

東坡が三年二満

東坡先生の言し三年二満とは鼻と額と頬と顎
しなるらしくなるとは南方の険しき所にて三島おこ
せの抱ならで抱て寝ては同じことなりやとなる
ようくし東坡を出たらくのよ抱ふ女郎しいふ事
よう女の情をてはこれは其抱ふ顔を向て見るなる

いやなる拙者の見るさへ美しいと云うる姫なりても女郎
又若々ような事さくなるまましてやし

情ある嫗しきなるべし

源氏と云女郎しるあひし人あるは古の人能く惚る
れしより其女郎の姿を絵子と見て書きるへ
又そるま付らんて詠ふまひけるは和くりぬ霧鬢
雲鬟画裏看離前空満菊花園及魂香識思萬
然獨抱明月臥欄干

何某の匯速

右南といへる者の云しを源氏は心ならして死なる
女郎なることを可責ことなるまきを心得るるれ配と

云ふ夫人のいふく昔の一の義いと答らんし余か云
く都て女郎を可愛といふ者ハ其女郎より人よりも多く
とても惜いものにあらずや人に惚れたる所は女郎よりゆき
たるを其女郎が思ひ染めにて扶くるなれバ
この女郎の可愛きは其女郎が向ふの男に
惚れたとて人合点すれバ一しと云ても一説なれど
に惜しいてむかふる人情なる愛しくハ青楼
夜論に書かれハ為にいとめたる情なる外に嬉
しき楊をなし弐人のいふ相撲と女郎ハ又
なるよしなり人の気集に楊を異なる加増
またも何れも思ひ出しとて早速やるべし

となるといふもの其者より勤むる故に楊を其
へんと思ひかへんハ早速やるるのし岩を除くて
いようと其者の悪しき振舞あらハ是きらんと
おもふものやむして止るは初見深く立せし
由とあるにぬ命し人を善悪ある故なれは
善のときは早く善を称し悪の時を悪を戒
むべし女郎の心躰も客にかし気なる入めよと
ても真實の絶ちをも引出して等分にしてお
もひ直さを惜きことなうますぐなし又客も
其心得べしとと女郎を悪いかなる会点すれ
ハ其上に弐年の悪きたと見つて見捨る去と為

これ苦界にて出世せし女郎もしも行末おとろへい
やつる賤しき姿に落ぶるとも命あるかぎりて生
まれつきをかへざるべし地女とならぬ心持なるべ
し是で情ある人となるべし

傾城床の五常

地女を熱遊の相手なる女郎様は平なるものなれど能く
五臓を養ふをもつて孝とす網目なるものに見え黄帝
岐伯の遺ひつれしものもあしさるものありて極
の平を奉ふ然うなく床に入ていふ然うつてもみ
きよや女郎さまと地女とを雪と墨とをおろか
なるを大偶と柊風丁子に清様の素近いまだ地女を

志つ熱洋く其句ひいやらしく不快さにたまらず起りして
内股のおもるひにうち熱ち彩然として腫経を
たくらうし鼻孔を損し女郎様はきをもちて
さしろしと云ふ上天の格にして其句ひ緋縮緬
の下紐の香るやうに枕辺の香ほのかに其香蘭
をうましとして香気をうける其熱ち五極み
く先に枕ることは気を目の前を迷し酒の戻に
解いそつるかの楚の宋玉と云し好人の風を熱ち
に迷ふ事は地に女郎雄風そなへし柳も其温
熱いのりして出るせをそ云ふ事なりよ
出ることを秘説なりとや夫盗人なる五常の道

を備へぬすまぬと云ふ事なしと聞えたる人の
土蔵の内を見すかして金のあるなしをしるを
金のない蔵と見たれば其蔵へはいかにしても入
らぬを聖智といふ又人の家に入事あれば大勢人
をもつて守り堅め用心厳密でも押込み其役
つとめて宝を取て帰るを勇といふ又其内にて時
我先へと逃去るをうけて内をきくものなれとも先へ
大勢の人をのこらず先へ出して其内出るを
てみせけるをしきを厳かに守るを義の心なり又
首尾よく盗みまして宝物を大勢のものに等しく
わけあたへ上下とも同じく割取らするを仁といふ又

盗みに入るともがら雨の降る松風の吹く晩にまつ
て其所を計りて忍び入るを智の能く知るなり
と眼遣ひ客に戴かしめく太夫さまもよそ五の義
を備へたまふとあるも手前の極り金につまる客
のいそがしさ程のつらささうとて世間の外ならば
見てゝめしも手紙を客に見せましそ小判は乏しく
水入の盃やら酒を揚屋の井戸より汲むものと
思ふ風情を見せ給ふを勇なるといふ大臣
さあらば男山程の山をつくり銀の楯を並へて太夫
さまの情合みするも仕合の情けはつくし難う
退るの根引なるはあなたの奥様といふき

なまるとなやしあそても此たる人あるに心をさまれぬ
若きとし我存も家賊に散るあひ共にこそう
ち町茶漬の畑て絶の楽したる負まき男に姿を思
ひあへし中にゆるて出合主方の目をぬすみ白に
心中ありて謀との床といふこともあの人擔ふ
らてきと氏神にも至らけて多くの客にまた同
前の床を出し彼ぞ負まき男を可愛がる心底仁にあ
らしてかくや身を差をいゐきとさりとも
かなしき中にもうてこそあのうるしさ何にも
父母のおんをも忘る懐のうてりといふ佛のた
めしもあるなるなんさいかららも爺様にう杖

さも又さぬ恥しいことを関東育ちの荒武者大臣
鼻骨を鯉の如く口を韮畑の中とく張りて縫
田前もの事を嗚つゝこそ酒ともころに能くさら
てさく清少納言ハ艶ある男のふるまひを書つら
ねしをおもへバ佛像田前のけしきさる俳ろり
細の戸帳を挫き稲荷様を其上持人形の手作
をお出し口鳴らしてさきつなる心をささえとも施
ふへきをのしも厭ず舌一つに出して甘そうに
吸ひて捻るとすき付た掠へとしても其男の嗚る
吸ろつこうしをふつても猫をゆすぶりても又とてのけ
みつうさし便求めていつも土佛像しるやかさ

椿のかうおもひ明石の浦なる味うさと思へと能く
味へたる孔子あらはしを何ぞや是を女郎の三ゐ六
十日の事よふくしいとおしまる續きおもふ土
ときとこたへ其の両もある男ありし土そとこたへを
二条家の傳授の說なりし都もこふ仁義たる備
へ辛酸醎苦淡の五つを備へて平の味なる太夫
と成しいたくる人參ハ甘辛苦の味ありと
註して赤を養ふ名薬なれハ女道のうへにても
太夫なる人參なるべし是れを思ひみん人能く
人を養ふものふる發明のおもはるも芳亭客
玩といふ薄きを五臓の刀斧といひしハ

ミたんと地女を書載きぬといと口惜しけれ
う替ハ大事
宿世いふなる縁しかむひ深くもちし此ふれ一
時もこの太夫の上をおもひ忘るゝし志とかく体
言を夢のかく深く思へは両親もこうつ論ひ
病しもうしみにも志みしくと少しをあけて
いなしひんれつてまで可愛らしさの眼ふさ
きぬとある心にもめをいふるゝやかや殊ま
ふしけんけふ女にあたきをハなとさし或人も美
人をあつんと云ハ拙きたちろなるべし親の諫め
世のそしりも厭はず両家に志ありく身を或を

此うへは内外の首尾を凌き七夕の年にも秋の契て
のみかりと斗りて恨んで過ふ心を向ふの太夫ハ男の
おもふ事も思ハぬをつらしとやあひし時ハ寝
いまは何ゆへ離れし左山の煙りならさらぬ心
のみうて身は恨みそつ身をきゝるは一念を岩
をも通すといへる末の松山のこゝろぬ夫婦は
ならそいふは朱しみを掴むへきと思ひこましても
女郎の方なる旌果てはいふかやなけれ思ふとも
片思ひにて叶ましやヶ様に心を苦しめ人ぞも
云まぬ下繭にも全て心を悩し心中立て外の女
の手を握らぬ様にするを見て愚衣なりしと

いふなる立派をなさぬ人許多にて浅ましきかぬ心なる
今宵郭明月様や独みなさんと然しも杜
少陵ハ心中そうし都で人の見る前にて大事に
するを密なる女郎の見ぬ不意の底を貴しす或
節度でも名をなりして大事にうつて世へさらす立派
なるとうや一秋云ひこうてもしま相ふてを首ハ
首ハ胴を胴と共にても引ぬうましたるゝものたと
なるを執了して女郎たる身のみを抱しまする者達の心
あるを中るにもひとつひるそをいつて見つしぬんハ
かうら様一生の中ゆひさししをして先いるなるの
なしま合るなよしま又俗のうちを越くと云て

実を云ふ事露なきことをなれハ大なることいふをいへり
其道理なるやうなれも氏の一字に忍ぶる虚言に揚屋
の旅も同じことなり一文ひろ指をつきまひきて不
埒の事あるをも重ての時用ひられまじ女郎也
いくたくの損なるや昔し尾生と云ける人
或女郎と約束して勿論質なる男なれハ親方よらせ
これ程の方なれハ橋の下にて待あひ宵の客衆を都
山の飯宿なれハ八ツの時分まで晩を待て殺客
を帰して待て逢ひ給はんと云しハ尾生忠
性しく秋の水なれども構ハす四ツの時分より伏橋の
下ハ行嵯峨松茸の支ハ様にて待居なんなる

折節汐みちて川水よどみ増ひて実子尾生か下
帯に付たるも構ハす爰をはなれても勤きなんぞ潮の
まへて見てもおもしろきさひ男しやと思はせてなら矢
八幡勤めしと随分力を出しと思へども川水
弥増りて終には流れて死にたりけるを世の
ぬと云ふことに花なるも我を折らずなしとを目出度る
を見てをいふハそのけの捨てはおかまふまいなんと
人はあわれ心中なるけれど後には言ひぬ事の
なるも又まことの忠孝も起し難きなれ
礼記にも夫婦は人倫の始なりと仰られし
聖人さへしめ給ひけり酒の席へいへしと云ひ給ふ

鄙は悪きところと思しめさるゝや十枚目男の方
にも首なけれバ立てまゐらせらるゝ女郎は弐月
あいだとて不便なるて出るまじきらしの能しといふべき
も少し下まはろあるべきなれバ

往戻りの端書

雨ふれば路は酒屋までもよらずして友達寄合ぬ
れバ何事も手前の太女郎見限りをしられなされ
ハなんぞなら参めてもこちの太夫の所へ袖を
あてゝ是の気色もなく界へ帰しと云ふも又見まし
しとどめもいやしく夫を捨て置れぬ不所聞と
云ふ所の八橋の風月で人もる千金く

と春宵一刻女房自慢の恋をするところの楽
しみなるを狩野養朴の云ひしハ春金で恋
衛つ坂を往くと見の端書をつ云しを思
なりと往て衣紋坂を入ぬ程ハ三筋の糸耳に
遠く心ならずとしまや島原の太鼓も名跡の端書
と云ふとらしまや京のすいへ人のかくて奴詳や様や
其情入るもちを同しといふなれバ

耳かき

耳かきは瀧川もよし耳をほるとまゝなりし
と云ふ和もよし仲もよしと云ふとて候し

柳の紋ところ

客の役者を様に仕るも左もある者を見る様なし
こともなき御心者のなる者となるも左様の事なれ
商売をなし扨られ去るなるなと云ふ余光つて思く
かけらしはしと思ふなるは青楼に通ふ客もなき
夫故に高く売るは其中にも多き人へいふ様なれ
けらるなるまし抱能役者は紫の花咲きもの
いやても其様は紫の色は紅の花咲をいふなも
其様は赤き気ある役者をいくらも抜くて置
其客は随分さし出ること江戸中幾多
も同しなるは少しも濁ることなけれどもかなん
ともかく様なるもの有し真実なるはなるも

へしきなるを目利の人るへき者なるをいくらも抜
へ来てさしのふなるをなるとも心得へし係しきなる
らく甘き味も口にうまけなけれとも付け
もなし

人のききく

地ならても役家を好む人を花果の人なると役家を
好まずして床を第一になるまじくなるも床を
第一とすることを賤しむるとも好みて悪き
様は嫌ふなる女郎を賤しきものなる床を専
のものにして能様なしたるも女郎よりなし
と云ひて行き足りとても三十以上の人に多し又

若き人ハまだ老も始なく手前の可愛きとお
もふて容儀を一とし目序も慎みを逢ふ高けれハ
思ひ入るべし

智辯

年若き生まれも素直に侯智ありて聖の教に
背くれハあやまちある士との不幸しく見ゆる
のみか心中いと賤しく物のなりも弁えなき物
ふと不来るもなん学ぶかゝりとも不ゆき生質く
ことはの按る道に来なる人物一とつ書物読
まぬうちへし志やと云紀おかし紀士とろしおぬし
集従さら論語読の論語志らずといやるなる八

古ちの古とを論語よみの論語志らずなと恥へし
古きなハ論語ょ書れたのるんと和らすといふて
ねらふといふさまし識て物の情を志らぬある心ふ
くハ始めもろめつる事ハ憎らしめ士とそうし
知てろうち其のかんもいらん志らずしてろほを
晴し雪隠ょ麻上下着て行く儒者ち嫁の文り
に冠を着て在るめくの堅くふさいそなる世の中の
楽をいふ物を志らずなるしれて白髪あたまに
年てから狂気うるていとゞ侮しうるわや

生駒山の鳥飼糟

むかし北哉人の納くよぶれてありしに床の花

生ずる也此石を白く黒く赤黄色も〱の石の一ツ
に塊りたる物の中に穴をあけて石生ずるしたる
物なるを能き見ざるは是なるん古草に載ざる子の
品餘糧なるんと思ひけれども未だ悟らざる人とを知
らずへ彼主に問ふて見し此石を何國よりと求めけるに
そとつの事也と答へて云ふやう此石を生駒山よ
り出づる事に候ふ出る石にて此中に黄なる石
あるそ夥しく出るもあるも又も白き麺の様
生ぜる出るもあり是に穴をあけるに灸をして
錐もみするを云ふ物これ故ふ石ならき鳥餘糧にて
るなんとをおもひて大和本草抔を取出して見

此も生駒山より出るといふことを載せず物も是を夏原
篤信も是をしらぬにや古るは人と思ひ多し
高山寺の明恵比丘に達ふて聞けんば明恵の
云ふにはこる鳥餘糧としやう何とやらん夫
は知らぬとも此石山にも出ざるやら大雨の後抔
八十七歳を二十斗りも所にて集めて出るなり
鳥餘糧とは大の山にこれを申さうず行基皿と
も申すにて明恵子取りて一ツ二ツ貰ひて
持ち帰りて鳥餘糧をみて又此鳥餘糧と
云物を唐土にても古書のはく論議して稀なるも
下にても所々に鳥餘糧は三種あるも鳥餘糧

とて太乙禹糧といふなり和名山のかゆ石といふ其
未だかたまらざるは石中に水あるを黄子と云本艸
に曰く太乙といふものは夏の禹王の師なりとその余
を飲んで仙となる故に太乙の名あり此石今勢山
にあれども鬼神守りて採得ること能はず或ハ
其里人究数と云ふものありて取るなれハ一日石
に餘を搗て一ツ究引替にするなり私にそれハ
取ることを能はさるを林石譜に書して祈閟山
總州の中なり に此の石ありて石の中に黄なるもあり又白粉も
如きなる粉あるも名付て是を禹餘糧といふ或
ハ紫或ハ黒きあるひハ黄なる或ハ白き

種々の小石ありかゆまりて粘稠なる練合せしもの如
くなるも有のうちに沙粉のことくなるを登真隠決
と云ふ書にも太乙禹餘糧を以て摘ふ四鎮丸の
法あり其詞にいはく禹餘糧六两を定め五两
を鎮ふと云り又抱朴雑俎に曰く泰山に太乙禹
餘糧あり是れを見れハ石なるも石の上に甲あり
甲のうちに白あり白のうちに黄あり相傳ふ
禹の御太乙是をのみて余りを 出此 此山に其の
名ありと未だかたはらにして水あるものを禹の卵
の如くなるものいはゆる石中黄子と云ふ今勢山に
あるとき粉を出す是も同じものなりと記せり

抱朴子三才図会本草図譜ゟ志（此中に艸と書しは誤也）と別録
其外本艸集解なとも委しく見へたれは
へし女人の崩漏常に子をうまさる苦しむ子
用ゐ目を張文仲か備急方にも死なる産
後の煩燥を治し癩瘡を治し傷寒の後病
に生を治し其外功あけていへ難し聖済総録
にあるしハ馬鈴糧と其実を等分して鶏の卵
にて解て癜瘡（出来ぬ所に付るもの也と）に付年八十年に
しおも盆をとりて宮に生ぬ山ハ水仙のなる
といふ山ぞんハあるやかくる琢らしきおも出れは
けるこ是医者なとも心得有きことのなるに郎

山の医師なとは及ぬれとも志をぬと云ふ人多し
そつかしき心なりと云へし

朋友の信

予か友達を藤可堂といふもの風雅なる生れに
て女とのふ和歌抔をぬみ誹諧なとも好みて有し
か三年以前に女房おもて程なくおや中よく娘の子
斗て二人にて過おもてありしか隠なく十年も部て離
の媒を成し夕し風の心地とて朝とや此歌を
夢と見残し枕のところ暖盆なとをさゝえてあてれ
や絵香の一烟りのそらに姿をなりぬ其折くるゝ枕
遊の祝引ゆて行先のまた秋も深し霧の

是とこふ発句を詠して帝る才あるまとものゝ夫を
れしぬ夕し金も歎歌を述て手向ける其詩
為に書付ぬ即席の志をよしあしまゝ志ゝの
あしてまゝよろしめ合せ述るて并序

伐木丁々鳥鳴嚶々出自幽谷遷于喬木嚶其鳴矣猶求友声矧伊人矣不求友生哉傾蓋程孔知識管鮑哲乎久矣乗月訪山陰望雲吟江東子期死而牙絃断叔夜去而向笛悲焉粤近藤可全者許東武河越人余自鞭竹馬揚紙鳶之昔相明至今為之形友也幼而離父長而事母孝順竭力也尊儒耽書性頗好和歌仰雲籬之妙什慕天橋之神詠呵唫常日學

東京藤原製

華文不出于毛詩尚書論孟之外如学和歌不越于古今八雲源氏之間而已矣故切戒門生之博覧哉雖偏固又見識遠矣哉毎賦一篇吟一首先示余相喜余亦截絶綴律而贈彼以且識且賞勿自楽其能雖哉花根鳥之朝莫雪晩月之夕未嘗相往相来不以共其興趣良覩以青眼詑以琴心者矣松何青々槿何凋落白雲横於東岱悲風起於北邙一朝臥病倉公術盡而溘奄積年二十有八辞世于郡山堀渕之茅於戯天歟於戯命歟今宵輓柩于九条西思旧激今渾洹断腸依賦一詩以述其意詩曰

昔謂共君観泗川奈何易簀任黄泉黄泉冥々往兒返白日無々悲斡旋原莚遊朝露未曝嵩拓翠

夕雨忽濺隣家笛裏憂腸斷遠寺鐘中愁湧連拂
石苔姿與命埋遺筐全華德与名傳不量千在一朝
陽莫憶君今死相捐　柳玉桂拜

詠に友きゝを得ふたる拂ひあしかくんを述て
空しき者の花ともふれたまへはんともいふかひも返し
ハ乃るそ只峯の嵐の吹てくるを木葉のちるらく
散かるのみにしていまさかしく云ても及ハす
昔らるを及の別れを未定の事を恋ふんなんと去て
なるんも力なく泣くよふに毒なる革の
わするも思ひ出る共の所へ手に能あるる
能を溢き流をまさひて男桔より思ひへ共に

三弦屋助十郎ときゝしにあまたゝびも志ろく伽羅よ
く嗅しいつしか後藤方にて十娃の時より三絃の手柄
ありしも何とはなく夜ぶかくしもそなたの烟と消
果ぬるこそ云も錺も家職をすてにし而もかゝる様を
みとなふ隣れなる女性の事なれ生れまたなかりし
ことを能くおもへりて何の枝に萬事掛かれる男といへ
ゐるに女の悦しきを仕合のうへに悲しきこともう
に筆をとてかく溜毋をすへしかる故おもへ共見ん
らうめくまことと悦く去ら女のおもひ付とすへし
と指に入まそなしんのましのすなるんかへ云と
もせ枝に女に悦ふられて命にかゝるしもかき可なる

さあやうきたゞちのことをいひなしといふべきに命をも奴
猶それは口惜しかりし

物いふ事の前兆あり

都て俳諧は歌にても詩にてもあらぬ兆なるをことわりと
いふもあらずて氣を付くるなり一としは月なりける
むかしの換なんどは左なりてもきこえてもとめぬべしむかし
東坡といふ人の詩に一枕緑莎風剪破驅他秋
雨不成珠と作りしを人皆これを不老の句なりと云
しかるに其秋の初めなりけるみなとこそかぞせし
おとなしいかにして落ちしけるや郡山の家の掛軸
きこえなきものなれども其えとても私として生んせし

ようなし此のきつみに住しことはなきなりきうしや
きて天井といふものの家に出してあるは文選の序
に引しことく冬は穴住と云ふ格にて上古の風俗
なりとも見苦しく数なる所なりとも古のいて住よ
きあるや孫が茅屋といふもの深山なる奥に
住人となりしなふても出林の窓なりん、とと思ふ氣
きひすくしたしつけ纔に葉ふおそろしき物なん
出行らんなや我ここそ獨床の床もて寒くまる
も、いふ換も不破の關屋に住居しきも云ふて
なりるは夫婦の契りは床も透間の風あらく夢
見るみるも烈しき心地しなむいなんといひもしなんへ

其色なれば細くとあるにて其黒きは　女扇子のあしらひき
美しき色しげしといふ事をよくきくべき事にて土の字も
なるおもひ見れば不行の古いろなし

人々髪のこと

髪の結様をいろいろあれども為因不と能ふべからず
とみ結を下くさきさげて下げてひらく様は志なる
八掛袖のうちより十八九までは小なとやうの生
うよし髪をいふとも大きさなきくしがうし　ゆつきな
鬢しまそくさくしたぬの下は小枕の入て結ぶも
よし江戸の洗髪をいふとしても其やうにてよし
添少を通用し片髷なと見苦し男の髪は本

多風と云ふものかくくるし見結の四角よき古し
多きよしそれは大きくたる鬢しく小ひとひるを見
くるし又人も流るべし尻折風をいやしそけなき
をつかふしたふの出すきくるき悪し男をたぬの
なるきくよし　油をつけて髪のひかりしきるを見苦
し油を少しはなし結なるつよし髪の度きて
人又はるなれと理屈に見えていやなるも今は大坂の
んかと言ひて元け先をいふまひらくも見苦し鍋
ある様ある事もあるを見えるで賤し大えの花俗
を何ぶろもえ申す麻上下の仕立も広くくして
おうしき姿あるて袴など短きをひろしかくそい

へと名を人にしらるゝ彼のものを少しもくみ送り侍る
ことありきなる生のまゝなるをいふなり風流なる
多く浴すくしうかいそりなる戒わもすゑて方を
後机に向ふて聖手を浴みたる事専一なくし道して
身は奇麗なる人にて異人を世の净めさもし
奇麗と云ふて人を整をよく清く額は奇麗に
身へきとは心掛へきことをなるは儒者なんどにも持
すなはちわけをなし整をよみ藤田殿の本でも
衣紋打しけなるなし大極も是こそ極なりと云ふ
殊に多くにて儀の集るべき振りにけの静か
極さるよひ歩行を見苦しからぬいふなり

姿をもつくりて至ても清浄なるを薮生先生もいつぞや
物性の数に誡容志たりきとなるなと唐土に
てる墨性とも学問に徹するを精を入れ奈つくし
敏性の論調にて真理に物をいひ極めに引続
き文章儒者の如く云ふなるをに入るの論まで
至いなる学問なきとても韻やに手を浴ふひきの
ふきことなひぬをもやなる

尺八

尺八と云ものは普化蘭若の吹物なりしと見へて又尺八
とよふものの一尺八寸とのさ思ふこそありし又一節切を
一尺と云なり是本一節切と云ん為に尺八と云

今きはいふとも云ふ今のこむ僧の吹尺八なるを
縫きしるしを云大森宗勲是ハ京の安田織部
指南一世言ひ傳る竹宗尼某人なり此道に達しき
者なり京一竹原伯叁杯も竹もし洞簫と
いふもしかそあるもせんとも尋聖社を引て
尺と志るゝのあるも画るも絵をして尺を左
持るも出るにして手中小児をも面にし小吹を
さらえの飛るも差向るとなり山寺のちこ子
恋慕しも此手を吹出しとそ有さらに明
日まいらふと云ねを言ひをとなり朝夕波間のたく
ひ移し山手ある傳竹を笛のつゝまぬうつして

吹しるを傳竹を能杯も是なる吹しとなり 称楽なり
谷元諸も能秋吹して吹金なるも秋吹をさへ敷て
進まくしと云ふ金を吉の春るんハ是を習ハれ
時漸うたふも一称切をあけても能の笛の都に
てのなるめともたち俗のぬき笛を一都廣に生よし
なるも薩摩の国の旅僧に章雲と云ふ人ありてこれを
伊勢国にすなり至極尺八の妙あるも七ツ八ツの年
よりしぬんて吹ての道の儒学の間の妙に達したるを
底にを堅くて尺八を吹ことをいましめ此方に教へ
墓参に出て是を吹き雪に降こもらせしとも知
らぬ土を耕し抱の土をなり何事にもよらん夫がれ

口穂を入れて青表紙にて行あるは何がし安藝の天
倫と云ふものゝ笛を吹大坂にて古卿とてその名
あまねく是より関東竹を吹事もなかりしとなる
関東竹をなしかるに上方竹より美し
うしてなりけるをなしといふ孟年位の事を書し
これを本ろしの笛紙といふ

鼓の胴

小つゝみの胴の作者を色々あれど金といふもの
にてんへ なかにはおもひ 千とせ 乗円 阿古女
阿古 古れりい 色くられりい 若宮しれりい
多武峯 牧井 親孫助 道孫やすけ

高山行流 堺一節 金十郎 久右衛門
なとなり 右の胴をうちつゞけるを 出来 多しと云
ふなれを出来 まゝく紫す 出来 よき御あ
つけの鼓を新たにゆしめ給ふ 浅黄志ら
何とかしまうさせまきを 素人と見へてよし

今時の人情

今の世の人情武士はこの ふ町人をはやらく人
備を位の店もくるしく立入るきの所の大きさふ
又子武士を利欲にこころ深く出家を欽と
なりて刀をさすには心なきを隣麿の姿をし
さもあれ殺害の姿をあらはし町人を戒めを

されど波羅蜜の行ひなれハあからうつくし

哀楽のうち哀

悲といふものハ楽の留まりて面白いと云事なれバ
うるはしき哀のこと悦びを可憂のうち火と水
のうち白いを黒いのうち色道の色を別れのけし
兎角云ふものれなんでも歩ゆるしく離るゝ土を
なきものとこそ我

山の部

美しき女房といふものゝ世界に独りもあらぬ美
しうて怪事けのなきを云ふものを又夫もある女
なし性格事ぬくて女房いひさにするなも女房

ハかくの満て土我世をなすもの女なく小人の多
き事同し割合なるを都て怪氣と云ものなる夫
ら可愛顔を出すものハ云ふなるも事らうに
なんきを云て人の為まて怪事する事をうなて
せぬ怪事もいなく女中の少しなるを叶はぬ
原はなんと能おけれもしさつゆるををすい
なる女中なかなしもち抱手前の事を入るに女
諸おて其女房の論ていなく丞を一もいおを入
是一角を花袖を入しなと怪事をくるしくて
さつそく心をいなるハ謎を照しうつくしき事
なるまこ花怪事のない女中しきとうもとも子張

のろさあるといや楽くし二世を能知滅のる兮
抄る弥念る云しろへ帰ることを口惜しく生底
土和国ゑなくりしてはる土を落て救くらへ月
未まへいえらきえしを済りて時乳をあるこを
能いすの俗康出るていたく分推うぃもとの腐
所の女へはる家名その女人の髪のうくきをましいて
のそけハ雷雨をいしらほせいふ於くひ其奥の
桑乞とらふ人女房を殺して給ふる又女房をひ
うくて閨へ入し時前の死しなる女房あらわれ出
て刀剣をぬいて桑乞ら男根を切て失たる
報ひるこすくあけもかく殺し時の謝在杭

此の楼は怪気深く障也とそ仏の教ある名
閻地獄へとやらん随ふるといふを閻地獄に和帰
ましらいか抄て苦労をあるきさなりまり罪
閻魔十王の前に於て怪気の女を出さ恐させる
と書しをえんハ人の家に通ひて継をなす女の夫と
女方と怪気あらしきたに口上の女中あらを見る日
もつらえ離廻に早く雷雨庫を剣すくに送りて女
破惑房閨の中に行まれ御覧ある六合に善く
送りぬんなを衛を役ぶ務して極いふ姿く多く
て事能の首をとらん眉をとも隠る如くの下に
仕事人世の一大不意なあくきやと書しもいふ

言葉に溺れし心からむなることあるに於て沈吟中
とさへいふ人ハ宋の学にて博識の傑なれバつねに
女子の為に迷惑せしと云しハ陳龍立といふ人ハ
道学の人なれバ女子の猛きに腹立たてまた手
ずおもし杖を返して氣も終ぬ斗に怖れられ
たりとぞ其外かく鏡し山の秋をいつはりたる実
ありけりとも申されなバ附し相集りて乱れたる全
なきに猶任ぬるハよろしき夫婦もまた女子を添
かるにも合点の行ぬるもそとおもひ人妻なると
いふ一字をよく工夫して見れバ三才智文学
のみにあらずまたひとつの関有とみへたり

信は家内の基

卿大將衛青を相給ひて卿たるに至らしむるに女房と
妻とを妻のかたに可書しと云ふいろいろ心得あることなり
文字なき書にも妻あと云ふの字を冬おゐて妻あの字
肩をも付し肩まで上ゆら角ひしの此方なる積して
あつからしい文字なるは妻の字を見ても見て肩にく
まつこうと見えて口元もうつくしげに跳つよふ
見ゆる文字なるといふ妻を持て女房を持る
其家の者も皆の氣を癒しいきといふ言葉あ
りも外の気をゆるして終始を盛まし也と思ひ
修身ハいつも我其家の悟拿の氣にまいらせん

男の方は甘味落しの方にするに妻を捨て其男と
男格りても志ても待ちかねたる女は草して切らん
とふ御来あるに女は家をこえて色命して女郎花
も世をんあると命して世も免うく男の真実は不
真実うを能くして捨女て色を命しとしつくことを
つけて宿をへくる女うらで口惜しさよ男女大悟
つけて其事も男を来し告まこゝ後みて女を行末
ともに子をもちて恐けれは男はもしもめ子をみて
いふは記よりて命は云ふ命つきさと行末をとうし
とみ真きいふと大名にいふの節部位と云ふもの
子をもちてなきうちは実しくさし事あらんなん

東[illegible]蔵版

ともに是ある是非世をよえてまきさしつゝみつけて北たすふと
云ふにもあんはまかりしもあるを何人根の類なるまつゝをも
いふ花輪丸も者としいえるとてもんえなききあるとを
女能く工夫すへきは身の落着とふとつまりいふま
身の落着とても色も香も捨の女とても情も無へぬ
方は一生涯をまもたらんうまては情しうえよしや
色うらの両側のいゝ記の離をさめむしんこそ
おもひやるさんとも女郎捨方うても地女気にても
色といふ為みてしきる質くて手つまる飲楽さき
来うき袖を行為てなるうともあの人なとてきいや
なるを二度あの人さ思ひるとなるは支度と云まて

見きくことを思ひせんと習ふを露の上に消るとなすのみも
身能ならんことをおもひ廻らさぬもあらしさんと
なまもつとものを遁るれるも其破に去しぬ苗
の中七八るせのお七の数は去くるもいくらと云
狂りのなるきは中止とれて死ぬる恋を去ぬるは是て
見るし追付火吹竹もつて夫婦いさうは町中の警
き出来ましと云ましもなのまとそろうて死と云と
のくうる男能うて気なるしのなしもと男女の
おさむの品格両もいとをふ色能の骨髄を知
らぬ為ろ色能の深とをふるの深い骨髄を知り
極てう八名も心中するて一縮娶かてせしるの様

を引操逃すとをふことをわいするゆへ代の一字を
守る為とみし俳も五常の掟端の志とし色もに
そて能まよも無能千年離るとつゐするとも色の錦
つくるとる恋てらるも天地をたる我常の工夫二字の切
をつみ出るに博ぬるちんは色能の大極意を志る
るさとばかり

草木の論

花も草も声えひすにて情あるを見る惜しき
るけしきあつき花をいつるもうるをしけんと
貝枝桜草の姿あいとめくし志らて匂ひもろ
きのさ艶なるもうし匂ひをなけれと海棠の

未だ開かぬ前の姿なる花の立し生ゑし牡丹を
姿もよくして立まさるものなれども白ひいやらし
好なる人は姿もやさしく花も濃やかなれ見る者
まで心もうきうきしてならる朝鮮なる人思ふなる人と
ハ姿怪しくむつかしうましても人ととも志つこくしらの
中なるもつらし紫微花は面白ふやさしく強く害も
久しくしてけらひてさるもあるを毒まなる花のやういえ
もきらしくならぬてみえて面白し櫻も一重の
よし多きを彼岸櫻は上なりし鶯の尾といふ
櫻是白しく花大きく見ゆれん白鶏の尾に似
たる者もよろしてアとしの尾と称るすやと思ひなる

又此鶏生駒山の麓なる人あつまりて酒など飲んで遊びける折節
此人も宿寺なる内なる男はいつもおかしきを
教と洲けん八鶯が尾山へと尋ねやゝありて其人問り
なれハ日なる曽ては出しけるしさて鶯の尾山は
まで行きなる先を行のみつやと洲なる彼人のいえる生
駒山なるに二町半里奥なるところ小さき山なるを此なるに
櫻の木ありてそも白くして見なる珍しきなる
りしなるとへ人々探り尋ねて数ふ其山かる花を賞て
てしの尾といふ由を得つれ柳なる鶏なる尾の櫻
又此ほやまよりまた出づることを伊勢の白子といふ所に
不断櫻あるを見ては不断櫻と呼てもてはやせり

なる事なり是迄ハ論ずるに作られて三百番のうちわや
見合しこの白菊に能き事を定めけるもありてさへなほま
日の雨夜ふる頃の花なるも又千株もありあひて三十六
種の歌仙もみなあつまり楓に見立て名を撰くる楓名
もみぢ葉のさきをしも又ひなを雨夜きそふのある萬寿濃
逸なる様なにおのがしの姿の侭にまひなくる
らい香を振出て開きし原がたいつのにたるらう
菊合なとまちて一つらん宛五ヶ所も見大きさ扨
さしをあてる桜は是なりし夫も折しく保屋
きなま七垣張廻し錦の日覆をかけし綾の
幕うち廻しておそかしいなる萬の人ハさて

いやらしうなくし土色の俗樂を見るもらし菊を
岩間などの石組のなくもなかな咲出たらん
おもふ心もいさゝかしかるくし楮の木を垣張廻す母
の中なるんハ見るんも傷しなる子うゑ一もと菊と云
ふも一本さへ数く花の咲き開くも心して見んハ
雨ふるまて様々にも余るを依見なるさ見る目も
つらし野菊の小松の茂くさしも峯の松の
斜にとりまはし自らうるはし枯梗なども
能に萌なるんよりも野菊を猶咲出る親
ましあやめんハ余もまさりの好みて庭に多く植
て楽しむ杜若をあやしむ影しふるけんもむ

うし薄もかゝれん筆まかせ夕皃の花も情深し
鼓子花ハあはれなし三日月ともその字あるとこ
才図絵なともみな見てもいやらしきあるを
サハ外数く書し難し浅くとして美しきハの
よし

墨并秘事 附手習

墨ハ李廷珪の墨よし徐墨と中間ハさしく半挺
もみな雑しと見へたれも奈良墨のよきよし中く
唐土も及ひ難し中国の墨ハ徽墨家氏と不
墨猴れてよし程の液あまり墨ならし美天常ハ此
君墨よし程君房十二龍夜もよし是も此ころ

流れる墨しきたりしは江戸にて玉林といふものゝ書
出羽といへる墨を商ふものありしが余が十五歳の
時書集めし文寶雑話といふものを出せしが見せよ
と望みしに借せて遣し夜の間に見えぬ是ハよき本なり
なりとて墨法を載せまし余が読しなの書の
中にて墨の事ある事を多く載せたる墨を用
ゆることを能くんはへし墨のよしあしも中にも用
ひ様にて能墨も悪く筆さくし又人より一夜を経ぬ
るあをを去て末にはさまなる墨の色をも
損するなり又井のへ朝く汲て用ひ置し
用る時羽二重にてこして能すりいつも静に

すこしのよし力を入れて摺ちてあらん硯もよろしからず
丸犬とうる端渓上磊のめきをあやきてはありとも金
四十一面硯を据へおんとも手前の気に入て用ひん
土府相公よりも給はりし硯のみなりとも心よふ
覚ゆる故手に手馴て用ゆるなるも都て硯をあつ
かふに湯をもちひし洗ふべし又墨をするに
広く好きてうすくし継古なる古墨古硯を上ふ
き籠に納め物なんいふうも秘祐なくし紙
筆墨水と四の物をとり揃へあらんめとうや
能書筆を選まずといふも理なるならむ墨
は遊ぶ硯といふを習ひびのらずなるまじく硯は耳

東京椿原製

の垢を少し落さねば泡立ぬといふなるべし古
金銅の水入をしめんとも是を好やすきを来合し
あしき悪しきなるは水の毒や
女を男の手を習ひ合し女の手をまなびあらん
をりうつるかへらうなるべし男を女の手を志
くひて書合し物書きうつくしからんと
おもふ人合てまじ

花の書

夕顔家隆の秘花せられし花の書といふ末
をきゝあるも少し志なるき引つゞきて
よからぬと思へども

画のまなひ

画は唐画を学ふを尊しいつとせしかなりけれと
名あるといふ程の画人みな悉く中華をま
なひたる我本朝画史を見るに古法
眼元信も何を学ひしそや馬遠夏珪牧渓なと
を学ひしと云ふ宋外巨勢金岡小野篁明兆
典主なとはしらん数多の名画と呼る人都て
中華なるを学みたるいつの程よりや学へるといへ
眷朴探幽なはし光琳の墨姿を好みて
一体をあらはしたる出しはんも墨画てはまたに
里彩色の手和らけき将たなきるまたなきなり其

えを好く林ち其骨のなまなりとも云ふたるなる洒落し
きたなき雪舟の画は石山寺内を画学ありて画
才あるき生れなるを狩野生趣ある事あつくと云ひしなるを
中京都なるを世継柳ハ従の名太伴と云ふの画才すく
れてよし立る用ひられける名あらんとの大坂とて
橋有根宗兵衛といふと云ふ者画きを見て笑ひなるにも
多くし吉田秀雪といふものの陸なてよく彩色を好
あれとも今かの何にて佳きあらんかむ好みたるも
北斎雪は文章なるによりてかしこく談なれ
りしなる彩色は上手なるを思し狩野を好みて
違ひて色々に描絵し描絵を好みて書なるを

東京 棒原製

宋の画ハたゞ筆にてなぞらへなぞらへ拙く生写したる閻梁
の画ハ未だ初心なるものなりしと又中古より云ふ者
画をうつしとるに未だ見ぬ趣しての世井のうつし生
健多くし梁唐宋元明までの名ある画をも見たる
ことなき故に画の力すくなかりし都て奈良の源
四郎の為すの画と云ふものを日本に二幅なきを見
へなき者多くし徐熙の為す画も七幅まで見えしに
養朴の云ひしは世の中に為す絵も奈良の源四
郎の為すはさらにも少なくて云くなき二位も出来ぬほどなりと
杉しおかれたるも千里の行も爪先の向け様
なれば一しきるおよそ人何するも目の付様なる

出来る事なるハ能ところの目をつけたる学
なれ人々早く其能あるをとふに悪き方に目を
付る人多くいつまでも其能あるを知らず学
へ人蝿と云ふ虫をも常に所の二町より外に飛ぬ精生
しらぬ者なれど夫なる外をとぶものなり驥
の尾にとりつけば馬の跡をおひよくと千里ハ
一日の内に十里目も行くなし先画も唐画よ
り学ぶなべし画を学ぶ人の為すべき書は芥
子園傳なると宣和画語律逮秘書の内画録画品
佩文斎画録名画録八種画譜画藪図会宝人
鎖績図画宝鑑画史冊青志南村先生写像秘

訣（王子善般ラ法を南村是を傳ふ）の類ひなりけり又ありける頃日画
答といふ書ありて出でたる後に役者といふ物あらし絵も浮
しき絵なり又浮世絵は英一蝶より奥村
政信鳥居清信羽川珍重宮川長春あり是らも
画の名人といふべき宮川祐信なり外にし西川祐
信を浮世絵の聖手なりとす

ビイドロ

ビイドロといふはその鼠璞といふ書ありて見れは中
華まで昔探検をなし與ゆる由なりとて又此ころの洋斯
国よりまゐりしものとあり世々かゝりて標来りて據るを
いふ能説ありけるし夫をビイドロといふ書あり

行き抜きて屆けて其法を秘していふ時
其側にて長き物を云ふ其ゝまゝにて是を何ぞと
云ふとき欺きて標来の物といふ由ありと答
へしを僕と思ひて折まに云ふにし替得是を
硝子なりと白硝を備て薬を入れて探りける事の外ビ
イドロの徳利杯の口かけなるを懐に扱て
其吹くにつてゝなりとて俗説に硝子をつふ吹き
小摺み勝利ならし出でて世の道理にもならぬ
あるを

まくら絵

色三味線曲三味線小唄の二書を書かけて独立の

文章ならて此集をよく味ひて書写しよんにん
多くひきんならんきもそと何れも続きてよし假字
於ては儀候紙子などとよけれせ賤し都て
其時文章を以てあるまとと取して能
詩のもと両箇よりま出て両箇にて文一通わらし
きちあるときまくらに終りてと閏の哭顔らなれ
菜花秋色の時雨文庫説義るとをいろいろあ
うたことも見えて古の能に文寶あるとを書
を読み手習物して書を学びくんの時を讀写
心を付きなるよし

比止里称 春 終

比止里称 夏

目録

秋のたつひ　女郎の渡こと
冬をと先と　衣紫のことよふ
和歌すこぶ　王義公の詩
そうよそ死と　俳佃の意味
志い色の記庭　土峰の巣
杏のあり　代夏の贈ぎ
まりぬ木　一条宗の句
寅将と皇都とおこ　野郎のえそし
春会のま出と　逝めの位

嫖翁ら外お彦　地漿多
ゑゝきいん　木芙蓉の花
琴の名人　絃出の名手
地口　太夫の襟
三味線屋市之丞　おかしの無平
口合　綾お
花表ゑ花の徘　象胥
楽しみを皆一ツ　嵐雪をとくひ
篆簾中　名おゐ不
印本の名句　多きさめ
飲料の行末　大伴の田主

東京榛原製

騒臭の如茶　烟亭主多主人
飼馬

比止里祢 夏

秋なきひ

さし昇りけるも久しく行集の古ちへの姿あるたのん
むなをつつみてもやふもとをしとおもひ出
て昔のある維のむら上れる月もなからけるも道
まつ雨降出て心清ふ斗りて夏雁け空思ふあ
のむら道渡るも宮すや恋路も上地をこのあ
しをと道し思ひあるして行きあらみつけぬ
居る古る霊の つふるしる れくさく寒け
く若しきしまして俄雨のてうちさきるー し

問つらしかくして五句にもやあらん何集にや歌に
えとりつきの都のおもあれこれまりして三助
の言も通るとき大臣も此岩屋の中に十六七
ともあまひけるにや動して行脚の火通ふ子
見あらき漆に象なる我をおもなる見へつる地
行脚を見しに夕し旅人の書捨しや太くまろ
くと女の身の検るも見く又国と翁の検るも定也
こものを書て書置も折かし例なる硯あるま
出のあるに僅でもまくにならひに互し印異の
発句 にほの秋も嗅蛙なきん秋なるひとつ趣
まよひ書付しや女郎さ句経る味なふこその と

云きに匂ひて石なる書なれをふん日味なる趣あり
に宵からも忘れて石なるあまりの契りも二星に
歎きも思はれ出られつ秋なるひを嬉しくなるとて
云ふことも久しき例なるとて夫木集に秋ふ
むひをかく訳ふまつけきて嬉しきくらし
桐に無とも相見へぬるま
女郎のまゝを
菱屋の東路に云ひしを男はてきゝと正酒
さくるけんを勸いさしきに流し切くあし
やと夜しまゝる府めしも厳なきき咲の出
となりても去とて思ふしまや見るも常ていやふ

容色とふしだらなやからは何の人なれとふ色も白きを
なかれ無言ともよふなけれとその化粧うつる
香とふしても忘れぬ於目まる容ある十分
色をいましても一分於思ひぬ容ありと云なれ
色白くくちえ目もとかきあらしい容於思ひ
めたりと実正なれんと云にかくしけるを馴染
とものあのよし本於とふても馴染みとのこと
なふしては何程の葉手もなきぬと云ふ正
説なる悪漢く云のなる人葉手ま金银も於ち
て心ねてうを申くしく年も二十一二斗りにして
親仁と云ものなる其なるえつと旅しかけなる

両国の男粋やすなる舟のはな鮫のしまめく
女郎もこの里ふまふ土を軽なきさをあるくし
男なる吉原の人あ計里あるなれば顔色てる
きらめくものきやらの香にまみ引付られるを
念ゐこなるくきさに神も仏も既ふけんの劉
今に梅くまきふ於と云ふておらし京屋の
志なる大坂天満の紀の国屋源州の女郎なれば床なれ
なるる伏見屋の江口子江戸の梅津川多淵の女
諸と共しを見ん女郎もよいと云ふ女郎も
なるいと云ふ男に云ふ振をいふとしても口杞
しなる大夫の云しをよくよく粋なれんものと

東京蔵

思ふよしむの出をなるもなうるる女郎をもあん
男の心のうちをめなしそをそつしとそふ出をみ
まし紀よし

なるを出と

此治大和屋まて角原にあ遊ある人あるまる此女あいの語臥に自まと
いふ格子女郎なるを江戸まて多くの大夫方をまも見大坂
なるも名ある太夫格子をも見なるも今から
京にて往て一文字なるの奥州となるの太夫をみんて
膝を濃しなるをいふを太夫の出をなるも女
ぬるもに昔のまい人をれをちんと膝をぬうせ
しとなふに任せていうさいまるも男を格おの

なるるも女の出なるなる香の名をも得まれ夫
くの女郎方を見し人成にいうしても其格に
誉るし出をそ定めて大作の多るてをも見まし
少しも斗を出して出さんよるを云しうは中
定まるて百分一つ律るも埒のあうぬるも治る
抑出の太夫とせしもと云ふ子とを浪経の出し
を出くぬくれうしなれと根を押て出すに年の
比十九つ上まてえなる斗りのよ上案よして
下の白まるに墨絵のうちのけ事を達まて丈真かう
にひくまるめしやせて目もとの紐とそのあを
大作の事なるもあの目にれみて御も延

を流石し八文字の一角をそろへん生のまゝとゝる撰生
しあるみ脳のまゝとゝう作る臭成なちいさく健
欲口もよる可愛しさをまる西兵の話するを天の咎め
逆しけんハいさぬよしるゝとつゝ生兎やり手引舟下男
の日今於ぬし抄扱やあしかゝけんあしらゐふと
先て其かさを御母にゝ奈さん浮鶯のたえ難き
神口もゝ軽ふ家もなきさ白梅のいまだ咲ぞあゝる梅
あゝる捨して名日まで立しや健のとこ説くらもし
のふ正云とてる雪のめくゝる襟をうつりて其安中
中腑の勝をけえるしめくハ枕て志こくとしえ
あの夕里に任をなくゝゝ烟草一ぬく吞花あやうる

なるを御鉱の宵まと今一盃拜しぬべきを云とハゞ
気余しく小言もくなるゝ申すをいふ事よき哉扱を
前て此大夫ま寒いゐもひとつ床の人て宵中檢て貸
みるゝとおとゝも上るし出ますをもえやとゞめてゐるまじぬ
と出す人よゝもゝ人此下常のさびける枝も生るも無若
なさし今ゝゝ此花更極のいうこそやえて来てなせ
とやのゝゝん小林といふとの会鈴本の鳴と云奥
行相撲の勧進をみるゝゝ上方へ律うてしけ
まま小森悩まして云しをあまるをうつしまさ来て
正ふたさしまなと云ふそこをお角兄せうも老し
ままされて正いといふまを心的か性しとを云ふ北井ゝ

目ばかり襟元のみうつくしうて目もとはいやらしと云ふ
者とは人々の目きゝにて女郎もすきなる男
とこの男あるべし　いやし羽手前よりいと男ぶ
りにてそれも人を見いと思ふも今の奥めかしけれ
つのてさらに又此数ひとつし土の大丈夫を嵯峨
の釈迦と同佗のよしあるとこゝに三國にひとつの城
とこゝろよしありも行て見物ハ早り難し其形えし
見るものみなかく奇妙なるを惣じて其世着物よ
しまで立派のさまであかるまゝしと云ふもよし
あるべし

衣装のことよ

小袖も土のみならずよろしき事なし居ければ
とかやなるあるも小袖ぞ姿も能く見ゆるにかゝる
雛形とこゝに挽こそよく抜くるのみなれ男も羽
織まての事もさるいと見苦しきに小袖を着
も元禄よし男の事もあるに袖を見てもつくし黒
小袖のみを外紗をなしかるも常を古き襴
紫の屋そこの茶人の袋に其類をさる古帯なる
古様うれしき袖を白めさよし江戸の世帯
の事の従ひ挟みて肩巾なる狭衣付て袖なる紙
し上方の娘の事の衣なるまゝくうめ家志
きをみれるも山かたおうしき衣あるを印古う

云ひしかども今常の留楼ハ困りたる都と云しならし
いつもの胸ハまじる常の話ひへ少しことを謀るの
喜ばしく思ひてあらる志やんなる楼ハもあるまじ文
志都に楼りもあるまじいてからしい楼ともなき幽
深鮫をまくし給舟の母子を逸こせしたる出ことを
謀北出を集くし拙して江戸屋は女中をすゝめい着
まる上方と深くもせうの志やんなる多くし庫の子と客
おいやし小出主計いつもや将軍の何等を命して
上客の娘もわけて去楼の揚のうす彩色も真の山
外甘外志やんなる事を考して奥様方へ頼んで
るなうへのつまの話を養朴等を朱印しを押て

あるもいと殊らし是なをいつてもあらぬ楼様
なるくしとい分る命を一下免なれを夫印を二月
とうくさぬ家のもしちたるんまいとこあもなく
なるまも出をて羅綺を着て楼りも夫なとを絵向
ハ去さ禄を見刑是ハ又楼ぬのしらなりしてんと
出ぬてならとのめにまは落るなるおいひさらまし

和歌の姿

こし夜思ふ女のもとくみしてはぬなんハ甘さ
しみのらるま　ちひとおく来の松山いつまし
もかつらぬをもを夫みこなさまんと去て世方思ひ
出るまなまいひやしまい　くちて中く　かいに丸字

御趣ありさんいとさしき節なれども殊にめでいま
しても姿あけなるやさしくなうくよろしく生
雅きをらいまらしくとしておもしい雅き白い
あるて歌を余るとをめしても知らぬまをなるまと
思ふなうよき姿なりしき姿をなるまく人の
へもなり即ち子も土の歌をえてし一つれ哉
やして涙を土佐しかも即ち小野を能く詠
まことを枕月宣河も心しまたとのふ答返
即ちちはし久て大和く信えを定めなる時の句
し八月十五夜の月いとさやうなれ私しま
余りもとく来るとて返ししき侍くし秋もふ

うたれ大和らの教業の名もあめ月の詠をくま
あきとか枕に詠やしも実河も土もくしく巻
てあるもしなるを

王荊公の詩

王荊公の詩に荷葉花開菩薩面棕櫚
葉散夜叉頭まさとなる。なる荷葉のひらけ
たるさまはしるを菩薩のおもてのやさしきに似
の葉の散しさまは鬼のかしらのおそろし
けなるをしるも世の中にてまたゆゑん
こそゆかしきもしなとなるてうつるもよし
いとあはれなる深きかしこきやうなるのかさの

下さる物扱し髪を見せつけなんとも是故菩
薩頭と王者をも及ばぬ高しきや女も姿あるに
て恋路ふかうし人々の身をも違へれやかなる
うち恍くさるるても命も惜しまぬ者は古今も思ひ出
よしあるおもひのおもひやとおもふもおもはし
し

姿もさえも

つれしくに雨に向ひて月をこひ散ぬる花に惜
いと雨がけれさんは太保衛つの家の集に一条との
梅が流しまではくぞめひしそこやむひことあり
て伊勢に参らさるゝしのは物らせあひて散る花
紙に包みて給らせなかしはさまをみだしくて忘
けは梅花ちるをえつらん人をいふまでもと詠みし
もひろられ深く都もの人のあはれけく其恋しき
物ならぬ身の憂に引くらべてあはれくきれは
其恋しき物ならぬまつ手折の身のかなしもし
とられへなるまま花も身を離れてこそあひの
まなとの可笑しきなるを

誹諧の意味

夕暮可適うたらい風景上の百韻をしうち
此方に道を契る末まろうとこそ勿々 芳庭
さ羽衛いまするぬくなるとはし大将いぼきさう

めつらしといふて而ふふまいなりとなし又　月的里
烏帽子着て行色ことといふ句あり　古人於山口
素堂の蕉葉ふたらを付し流徳点まれ杜
もしろふ思ひぬ四月の末つかた唐招提寺に
遊ひて木辻を迎る即興にいる愛に多く出
き出ふ時名をこのやうに詠しならと流州た
秀尾なると云ふ事らし却て芳しきもハ余てい
うハもの下手なるらし捨て覚ると云ふに如生の
云しもても誹諧も同しきとなると捨て妄心
自ずを来てふなると又田舎のたいうる風俗
うまきふなると余十五の春乗ありての望を新巻

東京榛原製

りしけるに林くの稲刈株しけるに芭蕉の雪のい
まだ稲からしを見て浅雪やさらひおろしの
稲の跡とふ書句を武江の点師共として
しく巻を点取にたれ見れとうり路をちまき
うちを云ふ句を同様なると云しかもいるる

志ハ其の理屈

フラソコの中に魚を入て机の向ふに生てた
くくくくる成るにハの魚めくの心もお其の見えす
くてハらしふとうへ見へぬてハらしのとそのに小僧
のうしなきうふ魚をんの志ハ其のきんまて江
接て見えすてと云ふさそくし怪いやつうある

うふそちつとふしん魚の志いんうきれたるを志るべし
卜やとさるおまへをたおりくれたるはわたくし志ひんの
き哉なとさふるをおそれちりて印ぞんじいろいろ
とさふむびのまとなりしをこちの知りてほとんどいふことか
こちらあゆみとまふ来りて同しきまつ魚の魚を
旅しを来てそちを今の慰ひ又い目と情をやるかな
待て休みとさふるも杙かなし

土蜂の巣

手習する机の角に土蜂の巣をつくりあまた日々に
青き虫をとらえて巣の中に引入れて来るを見るに陸
棲の虫魚蹴に云しむくいのめぐりして何の楽

三杯うしとさふるは太夫の義を売るに同し　東妹女
即ち住吉ゟおくりし手まりに何と申しこしあれそれ
取りしあとにや雲海の間に印鑑こちらなる
しとさふる太夫のあり蜘蛛になりてしまひ太夫ん
ちとかやうに待しも思ひそいろ巣のうちにちる
徳利のめく大きさ二寸計りもやあらん

奈良の山川

風熱よある奈良の山川のとさふるこちらの方とを存
云の事など覚へる文盲の私へまいりしなるほど八
挪らの本の方とうして山城の名所なるべし
行在の晩との

東京　□□□製

又し江戸の駒染北里の古寺にひとつの茶を飲みてみ
ゆゑくておこせたまひし昔しの持数くるおくりて行
のんきをいふをや大和のそしきをいうてまちきて
茶の子をも給ひていつて返し給ふ何もえんと思ふに
一昔の話あるを　下その隣やりていやく息のえんし
ある縣居花村西田居丸重をおくりよく〳〵あまま
又雲舟ぶてこ哉いとたらし紀

樹木

十二年已前の〳〵の流の云ひ出し多くても又く
椿花の落しに木といふもの好きとて木を上なき
古茗にもとゑて孫の盗み又あるし侍ると

東京 榛原製

揚巻所の書も出来た仕廻て差あけらるゝとさ
人のかくるゝぬいまさせぬけれし

一円斎の句

余いつもや青楼十步の図といふものをしたて新造
よりも始めて口舌の床朝かへりのけしき都て上よ
書図をしたりけるが終に一円画をえかきて名背
や嵯峨のあたりその書画自慢とかふさとをせし
まくてさかのあたりにて根引にせられ色も狂ひの
奥儀にあふれ枕人をとめやうとして仕尽さま
いと面白くつくり候はまた枕久に遊ぶならまさしくも又ゑ
らぬものや

美清と名乗りし者の
さし秋澤氏といふ女郎大にほれ心中せし
をりて何人の青楼も澤氏と云ふ女郎大にほれの事
そを基を打るものや　切んでるのをるも有し
おるくし女烦を云て深気一命んのきき
云ひて心を怨しうつくしくといふもの人の命と
いふもの推る往のまるるよくくるのうへよくく
といふよくもなにいる女と云かり女郎の手お
家中くのいきな四角八方をかく澤氏か身の上子
きしりけしたしたるつもくらぬ云の女をしる
死に上りし女も色もく話も付合ていいうやうなる

ちよ心中をいひかたし悲しいかな情に
迷ひ出るハ此道にも多かりし新町流のつ
みふかき平七といふ若者にてさうし源氏に
血筋なるよしを内々に借銭の泥あそびてを
あそびしも事ありけれハ恥をしらふ夫も無
祝言のしるしも無といふうちの金銀の及ばぬ故を
そゝる我ホ々揆なる男なれハ一年に二度つゝ離
出るもなれん心中所望仕ることも算からなる女
郎もわらハせしいふも女郎とてされ見え
思ひ付を事能くし家の為とて能き程を
為おきしもなるならし

野郎のそなし

女郎の中うの表をそとおもふ姫の気傳にも見えたれ
いうさ田てきハよろし仕立しなからも若衆髷の
初菊を云ふかとの云しを一中といふ人の教なるを
そうや朱文公の戴礼にも見えぬ事なり趣して
あなたの陽に語ひおくへ気千金なるを此女
ひもを付ることをいやし紐を付し女にあひたるハ三
日の嫌なるとていふことも里勝とも今これ
えらし都しなるを付るや康熙字典のことく此
女をさがらんと言ることをあこきまさるといふ文盲
のあまりなるも無生来時小言ういひしハとてし

らの勤いたしますゆゑ女はかへらんすしと時なる
心得ある諸芸までもおよそ二三ケ月のわざなる芸
のみならず出来るものとしるべし識あるなるべし然れ
女郎といふものもまれなるかしき情のみにて
こそ

閨の法さの事

やうなる者と町の者とお逢ひ女の違ひあるゆへに雪と墨ほど違
女郎はなほもなくて町人は多く思ひ付きてやうなる者
思ひつめたなるうちにもありぬるなれども其道を
やうなる者を先へ一手前にも抜きて行くしとおいて
さてなるれ四つ時なり来てるを暁七つ時分に帰る客

心せはしく夜あけしは女郎を起させ其上ふく
さくお立ちになりし揚屋の男なりとも何時しかくと
時を問ふもつらし或はやうなる者も鐘を打ちて帰る
逢ふ女の客人もあれど多くはさくつけなる女郎も
とても町人なるは心ある者は云ふなり尤もなる
なると同じ逢ひの損徳を申すもくるしからぬなり
まだ口惜しきを明けぬ先きを八つ過ぎには帰りて
女郎を剝染の男と云ひ合せまて招めなるは床
入りつきておそくも来る揚をいつも宵より行く人
しくたさんしおそくもきたりしかんに心を定めあ
の悟らしいのつらきとやらん何しや思ひ志らぬ

直なるとふ従ひも為ぬあるの事をいふ
出来さんの飛び居るの手品んしんらく志お
つきだしのうらくれも二階また元のようになっ云
ひきうけて姿をまくさせたりしにう見印るやう
やうし帰りて体を嫉しや見かゝりは内の事
しやと云ふもとより甘い事とてや、ひきまて
そこしぬ事とことて太夫女郎さ品といふ女郎さ
あそこの男は馴染のあるまゝしと合に立ること
此里の楼まゝことものゝ二人とをふるゝのこと云
しき揚屋の男は女まくしてやるまで事に
惜しとらくいのに因女郎もいろゝいやな四

気もなき者にして若しき人の因の品の男など
半兵衛なんどまでいやもされぬくと返し
道でも因果と云ふ逸話など云うも苦男を
倍せんとなるを持ちぬよしや此勤を取扱
いやなことをそのうちも人志しなくて又えの素人
手車など揚屋の男のまゝの中のそ一年などて
又なしして云ふの悟らぬ事なるを

遊女の位

昔もなど遊女といふをそ多人をそゝれの
取しは女の風俗とのまま世の人多しいのなきも
勤めの男をもしまえ浮きものの男のみの取扱

とも左もいやしき名あるなかなかあしかり男女三十六の歌仙
くらき所まてしまつ遊女の絵をいだし古今集の
うちなる遊女の歌を入られたる若葉集并行
ふ撰集抄つても女の髪切てをし行末を見め
うつし妙なる少女黄門公の遊女の日ようする歌まで
切とともに江戸の名ある抛物ともかけらせ大名
高家の小面うけて真似させられ其姿態をもけ
をひし今の大人ハあしかりや能登家来着ている
そのつかいに受くて居るもれうし義経の静き
さ川の亀菊所小徳とつても都でんやしハ名の
手をつゐたやうなる独りの男をたすけたりしなく

そのころ今の尾張小紫よし原にある名をゑかき名のう
て一体あるなる高尾の仕立月ひたいゆゑ名の出
しあたみ扨そし昔の江戸の名ある名とぶいや
らしい風俗ちあるする其を若ありける本邦の文
化あまひらけし志まし名もいえ志なうし七太
夫らて歌ハ隠ふ所よる手を読しすてあると云
ふいうなりその以て尾名尓し昔を遠ひ客衆の
懐まくしるするる名来を以て二字するわくつけ昔上
りを以うなしと云ふ江戸京よりよろみくいたせ
なるとかと云のうしてから二十一代集湖月抄
枕草紙栄花物語枕名花葉名女鏡館日記らしも

席におゐては太夫とみへぬ様に年も似合ぬ様に隠る
と人のいひなりけるよし本意なき是けれは今に至てもあるよし
茶の湯道具も二つ三つもちけれは、めうがやの初
菓子なども拵へ似合ぬともなくくの二葉が艶し
き勤めの中にて薫香の集のたしなみとて古
今の名を人の知りたるとまふ事を書たるもの集
てありけれ共百もたらぬ荊棘のつる志さ出つと
云ふ格子女郎のいふまゝし八女郎さ目も世郎
さ目うよし女郎も加減をするものかなしといふ
大目といふ今は七ツ物を合せての名つけるしと
云へり

嫖翁が邪相論

嵯峨のかくれ家に嫖翁と云へる寂仁一人あり
き此人何国の人ともしれず去る大家の傍に住しと
云も然らず過にし者ならん或人の云しを聞
文盛とかや居士の名に相応しきいろ〳〵浦なか、
まてし目あまりやうし本なれしと云へる柳この記
仁何事をなして此を送るといふことを云はず作家邪相論
といふ書を著して目の及ぶ所をさへ女郎さ
目方の人まじはりをもし揚屋待合に渡り
劇場志やうもしらず押付一筆なるほどまして
六月の初つかた目出度奥様なるものと志やう

まさか所望のまゝを改めんとなりしうちにとらしに
町毎に狂ひ出でて古今のさゝへて拾ひし
世に志なきは花と年をのみを見まもりとあるは
又行なき夫は出家帰りの二六と浄ふ道志やると
見くましく古さんとそんをいふはおえまりれ
えまゝを以の二六と浄く道志やまし年
能夫婦も志やよまう志やう代
わろしく年て香川のかくしき信者貴上
よるこの勤め心えなし丸山の衆と浄くあいし
つてよふ涛きをまもふと云ふあのたちへ大同
見容衆に向ふて能なと共とうぬと見くなる

押付型の浄い名をとら志やりまするかと云ふよ
を聞て手の中の物を捨うぬし青めの源吾と
名をよぶはまさに丹波の方へと云ましれ
夫婦の土手にたぞ見ひし人も見よしをとげる
は行未定のやうぬもの本流なる惜しや
花の吉わ世を傳とうぬ夫とはなし全くえし見ん
夫人と心あれど二人の見るに夫婦わるしやはね
未知と承りし又彼人のに接生ましめし傳授
をも得しうましくは傳授をも得しやうぬなる
思ひ目つき瘠え目利すことまで腕の淵前よ
り一寸斗もひらきて一分斗りの所ころある安郎

奥様ことへお勝手のまへうそなし目出たく相子
主目の尻に瘤のあるしやうていう年太夫なり
なる恋路の勤をきぬあれ離しといへる顔を
いふなり少さきをしる姉女郎の勤をして
やるを席になさくせみとて一つてえやる女郎ハ
押付て笑しきをしたに喜ふとさよふ白
しれたり

地獄水

菌を吃ましきあるをし松茸かくるけるといへる
吃めなりし吃めんハこれもあなたる時ハ是れふ
しれしも木のもとに色ハあんのかくかまての
前の土を堀てあとてみへ入つきれてこの所を茶
為し葉を喫なりも夫ハし土の中に大なるの土を
取る地獄水とあとなるるも本地にはえへたると生え
命なつくるなし

色き紙

女郎の名ききとてうき花きを飲とふ葉なれん
き時つきなるみなるを

木芙蓉の花

絣芳譚なんしを木芙蓉の花のつるみとつ
時になるなる為にないてなん夢とを葉に付花の
うちくそいき入てなる花のいらきうし時いろく

おのが姿まかへるとは是もおもしろし

琴の名人

琴に能ききこゆるもの人の志らぬ事をたづぬるに
八橋流よしはやりきも手に入りて雨もききたると思
今も此琴が好くと志しききたまへし故学びと
云ひ[illegible]なしてしもおうし都にも三曲も婦きて但るは
出ことん弾ききとあんのおふへもよききことなることは手
の耳にきたいやしき調ことと今よりなる琴を自
私と但うく朱なるは此つくし琴を但といふもの
果といふ声をもよくしいひて人にて手馴なれば
音は能になりてあることいつさや節も[illegible]揃ひの

東京 榛原製

かれ琴の音をきくてうはいまとしやことはいんいは
ととなつや帝しといふ琴の弾人いふ本なるを志え
らく是を学びてうまい琴しやと答なりし由を
今せれ様は此琴を北にくくましくなりて
琴の音も何[illegible]の事にんのときりそえれは老
云ん兵味のあらなるを他姿あるの音なる左の
出つくいやしき生んみあるもとふしても初心
の時の数ととの志きなる夫てをう年十ともなる
七歳の獅子を琴にて学ぶは七歳の声のうつり
うかがひもうまし行ふ所る是を気の隙る
承ろう八歳まとを語りても学は声をとを年ります

ちりつしきものこゝしるし石なると
手習子三味線よし姿手さく冬かの年去と
なるも我みも谷川の虫なる暮て十斗も習ひしう
手習子弾といへる筆もやるなるも字なるに候
多くし
えやかな　うきかな　さくら桜　ますかゞみ　小紫
名寄　うたゝかな　里のくるま　里形さらし人
月見　志るべ　氣になる　三谷かゞみ
一谷　かゞみ　秋草　すくさ　夏草
春風　まつの花　花の縁　八景　岩松枝
玉のさかづき　たゝしかも　藻しほ草

東京 榛原製

小松　七夕　花くらべ　よきよまる
いろ香　手枕　庭草　庭まろも
花くらべ　手鞠の猫　松あらし　東雲
まつのき　花の宴　さつき川　よきちゑ
源氏　はたらいの手すら　よりきもゝとなる　宵の帆と
いろはのかし　二谷かゞみ　秋いさ　春蝶
秋の夜　谷川の初手　えびす大海　舟かゝひ　なと
なきよし　浦のなる　若草の浮舟ゑし　又やゆき
竹　内川の志ろ　娘かゞみ草　なとといふを
流手ならる　都て　中小松とを　新手すれ　南ふ
し　これら　此道　花あす　内する　くてらしろ

なりき

鈴虫の名手

きやう助兵衛といひし上方の産にて鈴虫の名を隠

して河原町何右をとなへてそしてまた或日の夕くれ方

ころん耕のおさへいしさる時てあそびて三味ちん／＼出しを

西瓜なとを河原町をさん者の往来するをみかえ

ハ三四人もあつまりて此三味線をきゝて深く心して素人

ならやうの深しの上方よりきたりし見ゑ者なりとし

いよ／＼見つらしき名人なりといふまゝに江戸中もそれ

あまた人の大坂まで名ある人の評判して聞えし

楽しける鈴虫を三味線にうつしけて深ける

を

出て立出しける後名手を求ておことを素人なりとて

ならざる事なきをなしる其鈴虫のさまを

しるし庵主の出見し處な来らく開きてあきらかに

其後あらんハ桐谷の小静といひし女の師のもとに居なおれば

の鈴虫を真似しかばしかれとさる鈴虫聞けるハ

出すみハくいとふかしてよ猶みもあはけり美くらしいと

出しける小静がかし見ひて町人家にきゝけるちんと

いひしまゝ千歳獨虫の鈴くしき名にそ

に家名をも物語しそをおもひ出しておうし

ありき

地口

東京榛原製

地口といふ事をひと流行つゝきたる事をぬめんとなるき
さ月ともいふ事のなるを おもはぬにて思ひ出るまゝ
あるまゝそれにうしき

太夫の襠

いしやの東路かくる襠を預けて年しる無残
なる事二三人来たる所行けるおふし東路なる
預し襠を着て迎ひに出てよふ部さんしに
とてふ時庄といふなる事手を引て何のことさ
ゆるをわつのはつの女郎はなかろんしるもと云ても
おうし

三味線弾市之丞

市之丞といふ三味線弾をするも大尽なるきゝ手
居続客も皆迷けるまゝにや二階のきゝ床入せ
又して千秋楽しとうたひてあまたの女郎
揃ふて口拍子に床をいらでうんしきんくて大夫
なる相手少しもなしの市之丞と二階を下
まり行てあゝ悲しなる女し飲うけなる市
之丞つくしえへの方を見あけて二階波静
しやと云しもかゝる事七草く

おかしの画平

山の井と云へる沈香を扇にのせて流かせる市之
貴ひし木なるをいふくゑんと云ける相手郎

谷といへる者遁れきぬ木を、是甚おも面白し
水と云ふ人と飲うかしていかなる是堺町の茶
屋と云ふ家に一日酒飲みてん引うけてと云ふ
とき酔はしき手など書たるに名を松しも
謡しを唱て黒椒のきの書つけといふ時
なりし

口合

歌よみきたるを書しやと言へと、いふ花のよき
を望みけしと云まくて地口なる兄弟なる事く
なりけると
こし衣さる大夫をかへて帯をとくもえぬと

うんきん正気散と云ひし姿かてもらしさ、前に
なりし

綫杪

杪といへるを銭杪と通して札つかひのまなる三
才図会の杪図をみるべし

花表かきの様

花表とかけるとかきぬと俵本と大きなる文字とし
かくしてとるも来るもこといいうしへ賢者の風
俗にして門の印ともなる文花表といふを廟宮を
き席するをせるよりを姿島などもあるなり尤
は三才図会列仙下令傳なりしなり

象胥

象定月をまちかねし思ふなる人水滸傳西遊記通
俗三國志列國志などを唐讀にて学あくし六諭
のうちハいつれとそのおもむけならむ毛詩之讀
ちくし今唐よりてつる俗書抄を見る経学
者よりぬもむのおもてなき通詞ならてしらぬ奴
の事ならまし

楽しみを皆ひとつ

花のもとなる蘇を吉にある江戸の月の龍さかれ
らるも崇の志とく蝕引身のくいて一調のそしき
いと面白し笛をも吹なましたらむも心浮てなりて

庵も金ぬ舟つき郁〳〵なる夜のくらしさみしたそかれ
いえし麻上下きくひやうりして抑立れハと云ふ大臣
烏帽子なるも心うきやうなれとも中樂もよ雨をき
ますこなるありとてを金あるとうぬき馬の耳
は風やらんしよといふ花おもひ入の丹左衛門のそしき
張良の波を過とかれ江口の白雲と目ても雨の宣達
なつ胡のこととく見えしぬなりる大の小判の心なる
らん昔んと異意の六律の戻をあくまておもひ入
うるハ華行の心をおもしろいとなつそ人なる夫
能也なく志らぬ人をなりぬ能面白きさんつの土
となりし俳諧おもて面白いといふここなる上智下

愚とてうらぬる同しうらんや老きらるる北道まな
そぬひとさいやし

藝をまなひ

新内方ハいつれと同し事なる角をまわしも節
まね音ハさんハ志らぬなるも取上けな段なとまて
いろしく心おもむきなるもの。ハ節も世の中の人
ミなえん浄るり傳授いたしつとまめなる哉用しまかの
杵屋ゑくめんとも謠さしかたちらいなきるまのみ多
し其人藝ゑん者藝といふ二つもの教方あるも面
とへハゑん者藝とまおもてに在るよるまて名をまて
家をゑんとおもひて音の清あしなるへハ其家にいふ是

隨附し新内節なるへハ其節の隨附しも那ちなるもと云
なるまて其人こゝろさしを励まし力を用ゐれハ音も
なるへし一事なりとも志ゆるすことあれハいつとなく上手
丈夫仕立なる者を木地のまゝの念入て骨組たゞしう
なるへきなるまて一つ二つ二よりも三と次第に絶える
敵あらはまつこの李北楊貴妃の芸すなとえや一滴
を傳授するやうなるふしをまてま有し役人にハ何の二も
なき風なるも一番の習ひとならふしを取れても其人
のかゝぬ方と芸も夫まとふしてをふしやとしてる
一通りなるなる能き座を見る通りなすんとも大級方
のかよし以来てからしたるをなまん人新し 九

昔ハかなを文字に劣しれとおもふてありしに
ちかきころハとかしれ世とくらふ絵をかるるならぬ道
りもあらぬ卿のかるる世となりて人の為にかをも学ぶ師道
の後なり行事を行ひかをきけハ手前の習れよ
りもうらけりかつきことを好めるもあり又かかる
と不審をなしてききけハ此事を附る世ことを甚しくて
あなかしこ又其心もなく各ぶくれしく惜みかも
まつ人あやまりてあるひハ大名高家ハさしものいたし
能勢代の所へ行凡ものみなのとかく不思にして習ふ
あるひハ見とあるもすこしのしと伝授するる孫
益ありて後れんもありくれば楷書にかかるを真
の趣ともさまざまんのうちとめつらしくせらるる筆の如

東京 榛原製

4年　月

東京榛原製